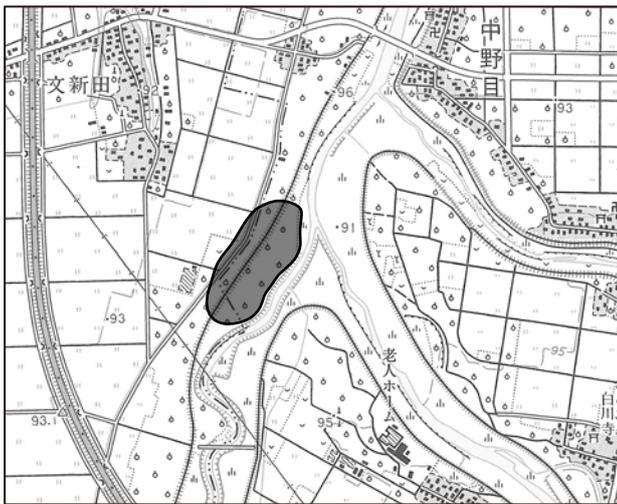


かわまえ 川前2遺跡（第5次）

遺跡番号	201-244
調査次数	第5次
所在地	山形県山形市大字中野目字赤坂ほか
北緯・東経	38度19分38秒・140度18分20秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業	須川河川改修事業
調査面積	2000㎡
受託期間	平成30年4月1日～平成31年3月31日
現地調査	平成30年6月6日～11月2日
調査担当者	齊藤主税（現場責任者）・白戸このみ・加藤津奈樹
調査協力	山形市教育委員会・中山町・中山町教育委員会・山形県村山教育事務所
遺跡種別	集落跡
時代	古墳時代・奈良時代・平安時代
遺構	竪穴建物跡・溝跡・土坑・柱穴
遺物	弥生土器・土師器・須恵器・土製品・石製品（文化財認定箱数：10箱）



遺跡位置図（1：25,000）

調査の概要

川前2遺跡は、山形市と中山町との市境で、奥羽山系の蔵王連峰に源を発する須川左岸の自然堤防上の微高地に位置する。遺跡周辺には中野目Ⅱ遺跡や上敷免遺跡、達磨寺遺跡、三軒屋物見台遺跡など古墳時代や奈良・平安時代の遺跡が多く分布している。調査は須川河川改修事業に伴い、過去4回にわたり実施されており、平成14・15年の調査では奈良・平安時代の集落が検出され、平成19・20年の調査ではその下層に古墳時代の生活面が検出されたが、今回はその西側の調査を実施した。

遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴建物跡、溝跡、土坑、柱穴、性格不明遺構である。竪穴建物跡は調査区中央から北側に集中しており、古墳時代前期が1棟、奈良・平安時代が5棟検出されている。地床炉を伴う竪穴建物跡（ST12）を検出したが、いずれもカマドは確認できなかった。調査区南側で検出された溝跡（SD1）は、調査区外に伸びると想定されるためその全容ははっきりとしないものの、約6.8×6mの方形を呈するものと思われ、その形状から古墳時代前期の方形周溝墓の可能性があると考えられる。しかし主体部が確認できなかったことから、竪穴建物跡をめぐる周溝とも考えられるが竪穴建物跡を確認できず、今後の検討が必要である。土坑は廃棄土坑（SK45）と思われるものを1基確認した。その他の土坑は性格、時期ともに判然としないものが多いが、焼土を廃棄したと思われる土坑（SK49）や浅く掘り込み、そこで火を焚いたのか僅かに焼成が認められる土坑（SK47）を確認した。

出土遺物は古墳時代前期と古代を主とし、前者が大半を占める。土師器破片が多く、遺跡の総量としては多くない。前述した方形の溝状遺構からは東海の影響を思わせる高坏や加飾壺の破片、砥石が出土している。また、その外側に位置するL字型の溝跡（SD2）からは北陸の影

響を受けたと思われる装飾器台が出土しているが、装飾器台自体山形県内において出土例は少なく、今回出土した装飾器台についても坏部に刻目の入る他に類例の少ないものである。これらの遺構の南側に隣接する土坑(SK45)からは、廃棄されたとみられる土師器の甕や器台等が多量に出土しており、いずれも古墳時代前期の所産である。他に調査区北側より弥生時代中期後半の甕の破片、奈良・平安時代では横瓶や調査区中央の竪穴建物跡(ST4)から「鬼」と墨書された須恵器坏、調査区北側の竪穴建物跡(ST12)からは石製の紡錘車が出土している。

まとめ

これまでの第1～4次調査と今回の5次調査では、洪水堆積層が認められ、洪水の危険にさらされていた地域にも関わらず、水運の利を得られるためか、断続的ではあるものの古墳時代から奈良・平安時代の長期にわたって営まれた集落跡であることが確認されている。今回の調査では東西5m南北200mという限られた調査範囲ではあるが、西側にその集落の広がりを確認し、本遺跡では初めて確認された方形周溝墓と考えられる遺構により新たな集落の様相が見えてきた。



写真1 調査区全景（南から）



写真2 ST5 完掘状況（東から）



写真3 SK45 遺物出土状況（東から）



写真4 SD1・SD2 溝跡 (西から)



写真5 SD1 高坏出土状況 (南から)



写真6 SD2 装飾器台出土状況 (北から)



写真7 弥生土器出土状況 (西から)

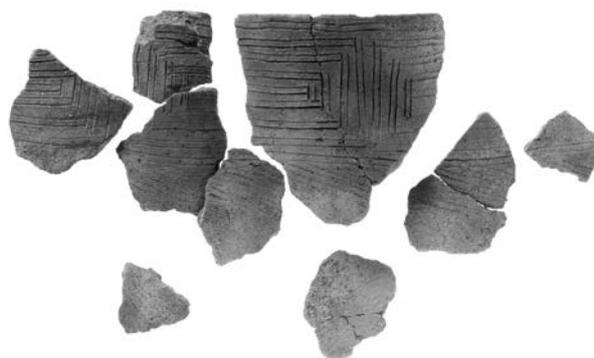


写真8 弥生土器

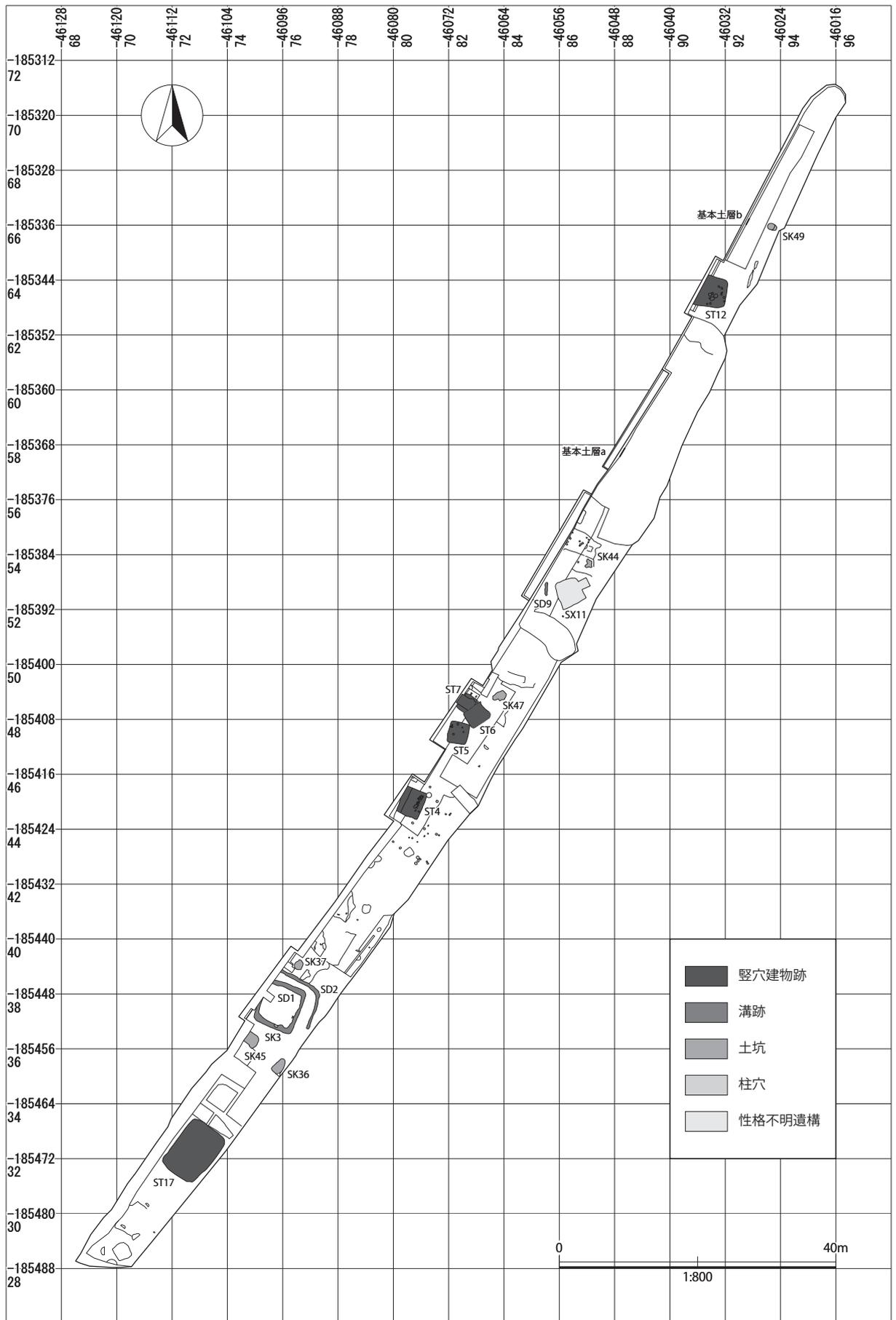


图1 遺構配置図